

# ワイン産地余市 高校生一役

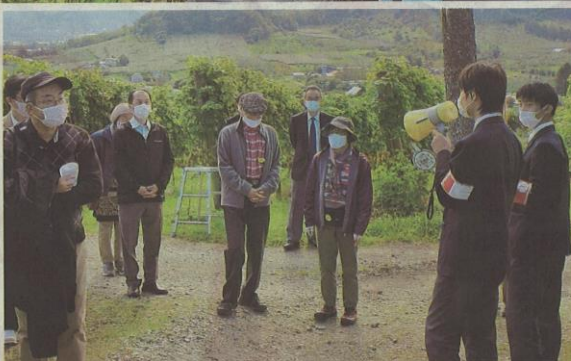
## 北星高ブドウ栽培し収穫 紅志高ツアーでガイド役



【余市】ワイン用ブドウの一大産地の町内で、地元高校生が栽培や醸造、観光客誘致を学んでいる。地域の資源を育てる経験を通じ、将来を担う人材が現れることが期待されている。(川村史子)

北星余市高の2、3年生8人が16日、地元農家の協力で栽培した赤ワイン用のピノ・ワールを収穫した。はさみを使って1房ずつ枝から切り離し、3年の木村羽未さんは「お日さまの下

で体を動かせるのが魅力。ブドウの木の(日々の)変化が分かって面白い」と農作業を楽しんでいた。ワインづくりを学ぶ選択授業の一環。2015年の初年度に100本を植えた



①ブドウの実を収穫する北星余市高の生徒  
②余市紅志高は畑や醸造所に観光客を案内した

苗木は現在、200本に増え、今秋は約80kgの果実を収穫した。町内のブドウ農家笠小春さん(34)のワイナリーに委託醸造し、来夏に約80本のワインが完成する予定。市販はせず、生徒たちが成人後に贈る。ブドウやワインをつくるだけでなく、観光に生かす取り組みも活発化。旅行会社シーピーツアーズ(札幌)が主催し10日に町内で行われた日帰りバスツアーは余市紅志高の生徒が行程を考え、ガイドも務めた。ツアーは道教委の「高等学校OPENプロジェクト」指定校として取り組んだ「ワイン特区と連携したまちづくり」の成果として企画。3年生20人が、札幌などからの客20人を案内してワイナリーやブドウ畑を巡り、バイオ技術を用いた苗作りの体験も行程に組み込んだ。

同社の嶋田浩彦常務は「単なる名所案内ではなく、授業で学んだ内容も盛り込まれ新鮮だった」と評価。ガイドを務めた同校の中称颯十さんは「準備が大変だったが、お客さんに喜んでもらえてうれしかった」と話した。

\* H P 掲載にあたり、北海道新聞社からの許可を得ています。